

演技の際の役者の感情

ーメソッド演技法とウォルトンのごっこ遊びの比較を手掛かりにー

森 仁美

役者の演技の際の感情に関しては大きく2つの意見があるように思う。1つ目は役者が役の中に完全に没入し、心で演じようとするもの、2つ目は役をより意識的、理論的に演じようとする意見である。前者の意見に基づいた現代演劇の実践としてメソッド演技法というものがある。メソッド演技法とは役者が登場人物の内面に注目することで、舞台上で登場人物が日常で感じるような感情を感じ、再体験する方法である。これについては演劇界において議論が交わされている。

しかし、メソッド演技法について、分析哲学の視点から語られてはいない。本論文では哲学分野の手法を適用しているウォルトンのごっこ遊び理論を用いて、メソッド演技法の心で演じることが、必要であるのかどうかについて検討する。

調査方法は、主に文献調査である。メソッド演技法とその演劇界での批判、またウォルトンのごっこ遊び理論についての文献のうち主だったものを選定する。「心で演じる」という問題について焦点を当て、まとめ、考察を行う。

本論文では、第1章でこの研究の目的と動機を示し、第2章で美学分野での演劇論の歴史を確認する。第3章ではメソッド演技法と演劇界におけるその批判をまとめる。第4章ではウォルトンの理論について整理する。そしてそれらを踏まえ、第5章で演技をしている最中の役者の感情について考察を進める。

考察では、ごっこ遊び理論を演劇に当てはめることで、メソッド演技法の「心で演じる」ということだけが、唯一の妥当な演技法ではないことが明らかになった。また、「意識的・理論的に演じる」ことがより観客の楽しめる劇につながる可能性を示唆した。

(指導教員 横山幹子)